

(八 名池之部)

大池 紀伊郡にあり、元伏見の沢田と云、半分久世郡に入る、小倉村にあり、巨椋郷と云也、池の廻り四里許、五社百首に俊成卿、ふしみ津や沢田の早苗とる田子は袖もひたすら見しふつくらん

二三 宇治川兩岸一覽 文久三年(一八六三)刊

眺鐘成ノ淀川兩岸一覽・宇治川兩岸一覽 柳原書店 昭和五三年

(上)

豊後橋 へ平戸橋の上ニあり、向島にわたす、当地第一の大橋なり、長サ百十間、北ハ紀伊郡南ハ久世郡に属す、此辺にいにしへ大友豊後守のやしき有しより名とすといふ、伏見院皇居の時は桂橋といふ、指月の縁にもとづくなるべし、北詰を豊後橋町といふ、此北に隣れるを玄蕃町といふ、石川玄蕃頭、又は山口玄蕃頭などの第ありし遺名なるべし、南詰を向島といひて、旅宿貸食家諸商売の家建つづぎてにきわし

巨椋堤 へ豊後橋の南詰向島を右へとりて、大和街道に趣く堤なり、秀吉公のきづかせ給ふ故に俗ニ太閤堤といふ、大池の眺望佳景なり、此地はいにしへ船にて渡りし所にて、横堤・巨椋堤なき初ハ宇治川の流落入て西の方伏見川淀の東にてハ木津川と合し渺々たる一面の入江なり、故に大和にいたる街道ハ木幡の里より岡之屋を経て宇治橋をわたり、一の坂を越て巨椋の南広野に趣きしなり、然るを秀吉公の時此堤を築かせ給ひしより大和往還の便宜なること普く世人の知る所なり

(挿し絵「豊後橋 向島 巨椋堤 巨椋江」、「其二」に「をぐら江

おぐら堤」「まきづつみ」の記載あり)

巨椋神社 へ街道のひがしニあり、延喜式ニ出、祭神春日明神、おぐらの里の生土神とす、例祭九月十日、当所の杜和歌ニ詠ず

名寄 宇治山の紅葉の色をかこふ哉 をぐらの杜の寛束なさよ

左近

巨椋入江 へおぐら堤より西一円に渺々たる水面なり、俗におぐらのお池といふ、池の長サ二十九丁、幅十五丁といふ、堤より東にも池あり、丸池といふ、其初ハ東西一面の入江なりしを、秀吉公の時堤を池の中にきづき給ふゆへに堤の左右に池わかれて二所となれり

此入江には、蓮・河骨多く生じて夏月の花盛りにハ殊さらに美観なり、小舟に棹さしてここに炎暑をさけ遊宴を催すに及びなし、冬ハ水鳥許多あつまり、且常に鱗しばし生ずれば、此辺の里民漁獵をなすの地とす、へ因に云、此入江の蓮葉蓮花ともに七月上旬にいたれば残らず切とりて京撰の精霊会にひさぐを風とす、さる程に蓮花の景色を眺望せんと欲せば、六月下旬より七月十日已前までに行ざれば見るこゝあたわず、遊客かねて心得べし

横堤 へ豊後橋南詰を東へとりて宇治にいたる堤をいふ、宇治橋まで凡五十町、此間に下嶋・上嶋・目川・横の嶋等の民村あり、横の嶋よりつづきし堤なるゆへ横堤とよべるなるべし、是も秀吉公の時に築かせ給ふところなり上嶋より黄檗にわたる渡舟あり、俗に隠元のわたしといふ

指月 へ豊後橋北詰より東江戸町までの地名なり、山を指月山といひ指月の森ともいふ、前の往来ハ六地藏にいたる街道なり

此所ハ伏見の勝地にして前にハ宇治川の流を帯て通船の往来絶間なく、西南にハ巨椋の江渺々として方一里の水面なり、月を愛するは無双の景色にて、古へより高貴の樓閣を営ミ清質の悠々たるを升、澄暉の霏々たるを降すの地なり

月見岡 へ月の後山にあり、一名宇治見山といふ、秀吉公此所に楼台をいとなミ月を賞し給ふ古跡なり

宇治見山隆雲寺 へ右同所にあり、此地は城山の内にして字を三河屋敷といふ、天台宗

本尊觀世音へ常憲院殿御念持仏にして石川備中守拝領して当寺に安置す、大師堂へ仏殿の東ニあり、元三大師自作の像を安す

当寺初は敦賀町にあり、正徳年中珍興和尚中興して此仏刹を開く所なり、城山当寺のほとりハ方十町ばかりの桃の林にして、弥生の花の盛りには紅艶の色をあらわし、宇治見山よりの眺望殊更によく、早瀬を下る宇治の柴舟、巨椋の池の水鶏、鳥羽竹田の行人、淀の城郭、八幡山崎の翠巒までも眼前に有て、騷人墨客の心を動かせり

(下)

鈎月(鈎月) へ横嶋の内の地名なり、今詳かならず

此地は四面渺々として東に宇治川西に巨椋の江あり、是ゆえに月を愛するに無双の勝地なり、古人此所を賞して鈎月と号く、伏見の指月、横嶋の鈎月ミな佳境として一雙の地なり

二四 京華要誌 明治二八年(一八九五)刊

京都市参事会／新撰京都叢書三 臨川書店 昭和六二年

(上 名勝)

遊覽曆表

(七月) 十三日 蓮へ巨椋池

(下 名勝)

南部

巨椋神社 久世郡小倉村

本社は延喜式に見へ、春日の神を祭る、当村の産土神なり、九月十日例祭を行ふ

伊勢田神社 久世郡小倉村字伊勢田

祭神詳ならず、延喜式社にして、貞觀元年正月從五位下を授くること国史に載す、社格は村社なり、毎年九月九日を以て例祭を行ふ

巨椋湖 久世郡小倉村

一名大池といふ、東西凡三十二町、南北二十七町、周回三里余あり、むかしは宇治川の流域ここに滙して巨浸となり南の方淀川に連る、万葉集の歌に「おほくらの入江とよむなり射目人のふしみの田いかりわたるらし」とありてむかしより名高きところなり、豊太閤伏見城造営の時大堤を築き湖河を区分し、また觀月橋より南小倉村に至り湖の東部を横断し道路を通し、大和街道へ上古は宇治橋を渡り平等院のあたりを過ぎ南都に通ひしこと史書に明かなりとなしたるより湖面は割して二分となる、西部最も濶く湖水渺茫として風光明媚なり、春風の朝秋月の夕は西湖二十四橋の風景を想見せしむ、東部は湖面小にして水稍浅く蓮花水に満つ、七八月盛開の頃舟を買ふて湖中を徘徊するに雲錦万丈清香衣を撲つ、花卉殊に大にして径尺余に至る、葉の大なるものは三尺余なるあり、例年水高き時は舟中に坐して遠近の花を見るべきも、早天には舟中に立つとも花葉肩を

没することあり、また河骨白菱同時に花を水面に泛へ幽娟愛すへし、看蓮の客は前夕より夜涼に乘し、伏見にいたりて一泊し、払暁の花を賞するものあれども、大抵は午前二三時より車を駆り曉行するもの多し、堤上の茶店に命し扁舟を僦へは一隻にして凡五六人を容るへし、旅店飲食店は不十分なれども、宿泊飲食等に差支なし

又この湖中魚鰕に富み、漁法も種々あれども、看蓮の序にはハス釣り最も興味あり、前後より幾百となく釣竿を流し置き翌朝竿を拾ひ上くれば五六寸の銀鱗澆刺として釣に上る、大抵一竿に一尾を得る、また消夏の一楽なり、但し前夜より漁父に命しおかされは間に合ひかたき事あり

二五 旧都巡遊記稿 大正七年(一九一八)刊

秋本興朝／新撰京都叢書四 臨川書店 昭和六〇年

(近郊之部二)

巨椋湖

小倉村にあり、伏見観月橋を渡りて右折し、更に南に去る四五町にして湖畔に到るべし、湖の広袤東西三十二町、南北二十七町周回三里に余れり、昔時豊公の桃山城を築くや、北は豊後橋より南は小倉村に至り、湖面を横断して堤塘を築き、道路を通じて大和街道となせしより、湖面は東西二つに分かる、西部は頗る広闊にして、御牧一口の村落、八幡の翠巒、宇治黄檗等の眺望あり、淡妝濃抹共に西子の艶に匹すべく、東部は水底浅く湖面小にして水光山色の風景に乏しと雖も、紅白の蓮花水上に満つるあり、杖を曳き船を泛べて君子の美を賞すべし、実に騷人墨客清遊の一勝区たり

巨椋神社

小倉村にあり、観月橋を距る大約四十町なり、本社は南面し春日神を祭る、当村の産土神なり、本社の前に拝殿あり、東に子守大明神社あり、境内に華表二あり、一は本社に属し、他は子守社に属す

観音寺

巨椋神社の南にあり、浄土宗にして本堂に運慶作の本尊阿弥陀仏を安置し、右檀に円光・善導両大師、左檀に中観世音菩薩、左右地藏尊・毘沙門天・薬師如来及び曼荼羅等を安置す

二六 伏見叢書 昭和十三年(一九三七)

西野伊之助／新撰京都叢書五 臨川書店 昭和六一年

(第五編 名所旧跡誌)

五 巨椋池

昔ノ伏見ノ広沢ハ、紀伊・宇治・久世・綴喜ノ四郡ニ跨リテ、其面積極メテ広大ナルモノナリシカ、豊公伏見山ニ築クニ及ヒテ、宇治川ヲ伏見ニ疏シテ水量ヲ伏見ニ集メ、之ヨリ巨椋湖ノ中央ニ流シテ大阪ヨリスル舟運ノ便ヲ計リタリ、名所記ノ著者ハ皆秀吉ハ要害ノ為宇治川ヲ伏見ニ引キシト記セルハ大ナル間違ニシテ、其儘ノ方遙ニ要害宜シキナリ、巨椋湖ハ此ノ宇治堤・小倉堤ノ築造ニ依リ、其面積ハ広沢時代ニ比シ大ニ縮小シ、六地藏沼・四谷沼ノ分湖ヲ生シ、次テ慶長元年秀吉ハ毛利家ニ命シテ淀川堤坊ヲ修築セシメ、其年ノ冬竣工セシカバ、又横大路沼ノ分湖ヲ生シ、爰ニ伏見ノ広沢ハ全ク巨椋湖ト改称スルニ至レリ、殊ニ従来宇治川本流ハ宇治ヨリ直チニ広沢ニ入りシモノ、秀吉ノ川ノ付替ニヨリテ迂回シテ淀ニ流ルルニ

